反天皇制運動
Alert 51号
［通巻 433 号］
2020 年
9 月 1 日発行
第Ⅹ期・反天皇制運動連絡会

今月の Alert ◉権力支配の「空白」を再び憎悪で埋めさせてはならない――＊2
反天ジャーナル ◉――宮下守、映女、たけもり＊3
状況批評 ◉ 東京五輪中止からオリンピックそのものの廃止を目指して――宮崎俊郎＊4
書評 ◉ 平井一臣著「ベ平連とその時代　身ぶりとしての政治」――有馬保彦＊6
太田昌国のみたび夢は夜ひらく〈123〉
◉「八月のジャーナリズム」から遠く離れて――太田昌国＊7
マスコミじかけの天皇制〈50〉〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その15
◉〈祭祀大権〉と「戦没者追悼式典――天野恵一＊8
野次馬日誌＊9　集会の真相＊10　学習会報告＊11　反天日誌＊12　集会情報＊12

字幕翻訳家である戸田奈津子さんが、50周年のインタビューで、「“安堵”と訳したら、若い観客には難しいから“安心”に変えて欲しいと配給会社から言われた」と述べ、言葉が軽んじられる風潮に懸念を示していた。

８月１日の集会（報告参照）で、講師の北村小夜さんが、自著の本の制作過程で編集者との間で交わされた、若い世代に伝えるための注釈についてのやり取りを紹介。編集者が絶対必要と主張したのが、「撃ちてし止まん」だった。あの時代を生きた者たちにとって、その言葉は巷に溢れ呪文のように渦巻き、人々を戦争という狂気へと駆り立てた。敗戦から 75 年。その言葉は今や注釈を必要とする。

私はこの夏、この「撃ちてし止まん」という言葉が、戦争の記憶として刻まれた美術作品に出会った。

東京都現代美術館で９月 27 日まで開催されている「いまーかつて　複数のパースペクティブ」展の岡本信治郎による「ころがるさくら・東京大空襲」である。1933 年生まれ、70 代で取り組んだパノラマ。リズムが聞こえてきそうなポップな作品。おどろおどろしさは微塵もない。けれどもそこには、天皇、詔勅、南京大虐殺、アウシュビッツなどの文字がびっしりと並ぶ。羅列された文字はアジア太平洋戦争の記憶を呼びさます。若い人たちの姿が多い。彼らはこの作品をどのように受け止めているのだろう。

浜田知明、鈴木賢二。敗戦直後から十年間上野の地下道に眠る人々をデッサンした佐藤照雄の「地下道の眠り」らは私を引きつける。藤田嗣治の「千人針」も展示。

会場は１階、２階にまたがる。お時間あればおすすめです。

（鰐沢桃子）

250 円
●定期購読をお願いします（送料共年間４０００円）
●郵便振替　00140-4-131988　落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A　淡路町事務所気付　落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460　URL http://www.ten-no.net/mail: hanten@ten-no.net
●以前の情報はこちら▶ http://hanten-2.blogspot.jp/

今月の Alert

権力支配の「空白」を再び憎悪で埋めさせてはならない

目の前のゴミがなくなっただけで、自分が手を下さないのに、あたかも掃除が終わったような気分になる。ゴミの山に埋もれていると、そんな錯覚に囚われがちだ。安倍が再び政権を投げ出したという報道が流れたとき、じつに清々した思いになって、金輪際みたくなかったその顔が半泣きになっている記者会見のテレビ中継までつきあってしまった。しかし、その内容はというと、もちろん、七年八カ月余りの第二次内閣のみならず、長期にわたる与党のあらゆる政治支配を居直るに過ぎず、報道は、「難病」により「ココロザシなかば」でという美談もどきに仕立て上げられていて、不快感をいやますものだった。

この政権では、大きな批判を無視して暴力的に突破した「特定秘密保護法」「安全保障関連法」「共謀罪」、またTPPや労働法、カジノなど、多数の法律の国会強行採決のみならず、「集団的自衛権行使」の解釈改憲、「公文書の破棄・隠蔽・改竄」、政権周辺の贈収賄や縁故利害などの腐敗など、あらゆるものをもみ消すための閣議決定の濫発がなされた。さらに、二度にわたる消費増税、官僚人事の私物化、特定企業との癒着やメディア支配、中国・韓国・朝鮮へのヘイトの拡大とアメリカへの拝跪など、この安倍政権下における負の歴史はあまりにも大きい。そして、その構造をそのままに温存し推進させるための次期政権も、本紙の発行のころには、密室での談合から発表へと現実化しているのだろう。安倍政権の下での憲法改悪こそどうやら潰えたものの、議会の構成には何の変化もないわけで、なお危機状況は続いている。

●

今年の八月一五日は、先月末からの新型コロナウイルス感染の全国的拡大により、全国戦没者追悼式の開催も、靖国ウヨクの動きも、大きく抑制されたものとなった。そして、こちらは残念なことだが、会場の制約から、私たちの集会や行動も制約されたものとせざるを得なかった。そのような中で、四人もの閣僚により、四年ぶりの靖国参拝がなされた。また、安倍は今年もまた玉串料を「奉納」してみせた。

このときはまだ今回の安倍による政権投げ出しの二週間前の段階ではあるが、それでも内部では次期をにらんだ動きが胎動していたのかもしれない。思い起こすと、安倍が靖国参拝を行なったのは、「特定秘密保護法」強行採決直後の二〇一三年一二月のことだ。いま、「敵基地攻撃論」の具体化も検討されている。この種の連中が「戦争神社」靖国参拝や、神道などかつての「国体」に依拠するかのごときふるまいに及ぶのは、まさにそういう状況を背景にしているからに他ならないと感じる。その意味で、「安倍以後」の体制をめぐり、今後はさらに極右・国家主義的な事態も、拡大していく可能性が強い。

天皇や皇室らは、この「コロナ状況」で各種の式典など天皇・皇族行事が減って、発言機会をなくすとともに、その存在感も昨年と比べると大幅にうすれたものとなっている。そのことは、皇室メディアやその周辺からも指摘されているが、もちろんそのままに止まるものではなく、前号でもふれたように、むしろ「ご進講」は活発化しているともいわれている。式典などの公的な場を持つことができないまま、そのような「ご進講」での発言がメディアには流されてきたが、今回の「全国戦没者追悼式」では、徳仁は初めて「新型コロナウイルス感染症の感染拡大により新たな苦難に直面」「私たち皆が手を共に携えてこの困難な状況を乗り越え」「人々の幸せと平和を希求し続けていくこと」を願うという「おことば」を述べた。こうした発言もまた、コロナ状況をきっかけに露呈している貧困化の拡大や、それに伴う国内政治の流動化、対外的には民族差別・対立の先鋭化などの状況をふまえた、天皇制の側からの危機意識のあらわれと見える。しかしそれは排他主義を強める方向に向かうしかない。

トランプ不利の前評判も少しずつ沈静化して、アメリカ大統領選挙のゆくえはまだ読めないが、中国や朝鮮による「危機」を煽りたて、軍拡と国家への求心力を策する政治手法は、共和・民主のいずれが政権をとっても、今後も続くだろう。あたりまえの思想や論理ではありえないような憎悪は、コロナ状況など不安や恐怖の下で手に負えないほど大きくなっていく。ネットなどでは、天皇や皇室のみならず安倍ごとき政治家への批判にも「不敬」とする攻撃が横行している。あらためて、私たちをとりまく酷い事態を認識しなおし、必要な作業に取り組まなければなるまい。

（蝙蝠）

反天ジャーナル

歴史認識かヘイトスピーチか

八月二八日の都知事定例記者会見にガッカリ。

都立横網町公園で、九月一日開催の関東大震災並びに都内戦災遭難者秋季大法要や関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式直前なのに、朝鮮人犠牲者追悼式への追悼文送付の質問はない。

八月八日の定例記者会見で、今年も朝鮮人犠牲者追悼式に追悼文を送らない事実を明らかにした。それで役割を果たしたと考えているなら甘すぎる。

小池都知事は就任直後の二〇一六年は朝鮮人犠牲者追悼式に対し追悼文を送付。それを二〇一七年から取りやめた。その理由として「震災の犠牲者全てを対象とする法要で哀悼の意を示している」としたが、朝鮮人犠牲者追悼式追悼文に記載の「極度の混乱のなか、多くの在日朝鮮人の方々が、いわれのない被害を受け、犠牲になられたという事件は、わが国の歴史の中でも稀に見る、誠に痛ましい出来事でした」という部分はなくなった。この記載はどこに反映されるのか。

そもそも都知事は関東大震災の際の朝鮮人虐殺があったことを歴史的事実であると考えているのか。なぜ質問し追及しない。

都庁記者クラブ記者はヘイトスピーチであるかどうかにしか関心がないのか。それで「権力監視」と言えるのか。

（宮下守）

安倍辞任と映画「はりぼて」

史上最長の首相在職日数を記録した直後、安倍首相は持病を理由に辞任した。二度目だ。さまざまな憶測が飛び交っている。トランプの在日米軍撤退恫喝！スキャンダルまみれのさなか、河井元法相夫妻の買収事件に絡んだ疑惑等々……。彼により日本社会は大きく右傾化した。教育基本法の改悪、道徳の教科化、集団的自衛権行使、事実上の改憲、男系天皇固持……枚挙にいとまなし。

中央政治の腐敗は地方にも及んでいる。〝有権者に占める自民党員の割合が一〇年連続日本一〟の保守王国、富山県。二〇一六年夏、地方局「チューリップテレビ」が〝富山市議会のドン〟なる自民党重鎮の政務活動費疑惑をスクープ。ドンは議員辞職。その後議員たちの不正が次々発覚、八か月の間に一四人の議員が辞職。反省した富山市議会は政務活動費の使い方について「全国一厳しい」とする条例を制定したにもかかわらず、二〇二〇年、不正が発覚しても辞任もせず居直る議員たち。不正を追及されてとぼける議員たちの表情が、みんな同じ！　滑稽そのもの。

映画「はりぼて」は、政務活動費スキャンダル発覚後の議会の底なしの腐敗と議員たちの開き直りを追う。監督のひとりはなんとその後辞職。

女がいないおっさん政治は、血税をいかにポッポに入れるしか頭にないのだ！

（映女）

日常の「有事」と向き合い続ける

光は一秒で地球を七周半廻っている。そんな大宇宙から見れば人間の人生など一瞬、だが現在の環境や社会変化の速さは異常で急速だ。人災から再生産されるウイルスに翻弄される今、人間のあるべき姿が試されているのだろうか。多くの人々が目の前の日常を生き延びることだけに精一杯になってしまった現社会は、近代国家がもたらした断続的な「有事」といえよう。

どこへ行ってもマスクをした人間の顔ばかりが立ちはだかる社会が、まるでSFのように怖くて狂気さえ感じる。かつてあらゆる人権に優先した国歌斉唱、「君が代」を歌わないことで罰された時代があったが、今は命を守るためにマスクをしているのだから歌わなくても罰せられたりしないのかな。「君が代」の「君」が何かも考えることなく歌い、コロナ対策はマスクだけかのようにふるまわざるを得ないことこそが人間の劣化であり社会の崩壊の危機だろう。しかも、日本ばかりか世界の「先進国」と言われていた国々でそれが常識かのような報道も訝しい。

「有事」は、いつも私たちの生活のなかにずんずんと染み込んでくる。人類は、近代国家が一瞬にして崩壊しかけているこの「有事」と本気で向き合うことができるか!?

（FUF／たけもり）

状況批評
思想・状況・批評

東京五輪中止からオリンピックそのものの廃止を目指して

宮崎俊郎（オリンピック災害おことわり連絡会）

引っ張った末に決定された東京五輪の一年延期が発表された三月二四日から早、五か月が経とうとしている。そもそも近代五輪史上、「延期」という選択は皆無だった。「中止」は夏季大会で一九一六年ベルリン、一九四〇年東京、一九四四年ロンドンの三回、冬季大会で一九四〇年札幌、一九四四年コルチナ・ダンベッツィオの二回で計五回。いずれも世界戦争拡大によるものであった。

そもそも「オリンピック憲章」に「延期」という規定は存在せず、「オリンピック競技大会は、いかなる事情のもとでも、ほかの年に繰り延べることはできない。一つのオリンピアードの最初の年に開催しないときはそのオリンピアードは取り消しとなり、その選定された都市は開催都市としての権利を失う。」と規定されている。

オリンピック憲章とは国家に例えれば憲法にあたるオリンピックの規範である。延期というのは憲章違反であり、だから近代オリンピックにおいて延期という事態はあり得なかったのである。それをバッハIOC会長の一存で承諾し、事後の理事会で承認させたが、超法規的措置であり、本来憲章の改「正」をIOC総会の出席委員の三分の二以上の賛成を持って行ってからでないと成立しない措置だったのである。

三月二四日の延期決定は安倍とバッハの電話会談でなされた。これこそがオリンピックの政治性を象徴している。少なくとも小池・バッハ会談でなくてはならなかったはずだ。電話会談に同席していたのは、森喜朗組織委会長、橋本聖子五輪担当相、菅義偉官房長官で、山下JOC会長の姿は見えず、その後のインタビューにおいて「一年延期の内容はテレビで知った」と発言したくらいだから、完全に蚊帳の外だったのだ。そもそもJOCは東京都とともにIOCと東京五輪の開催都市契約を結んだ当事者であり、安倍や菅、橋本聖子ではなく、山下泰裕が小池と同席すべきだったのだ。

つまり「延期」の経緯を振り返るとオリンピックというものの本質が透けて見えてくる。すべてがルール無視の政治的ご都合主義で決断されているのである。

▼Olympics with Corona

三月二四日の延期決定後にコロナ感染者が急増したことは、東京都の感染者予測文書の廃棄事件を見るまでもなく、いかに東京五輪の2020開催に固執していたのかを証明している。そしてそれは感染者対策ではなく五輪開催を優先した日本という国のどうしようもなさを多くの市民に実感させた。

この市民の気持ちは六～七月に実施された多くの世論調査の数字に端的に表れている。ほぼ三分の二の市民は来年の五輪開催には反対しているのだ。

日本のコロナ状況も出口が一向に見えないが、世界的に見ても北米・南米では猛威をふるい、世界全体の感染者数は二〇〇〇万人を突破した。しかも新型ウイルスの全体像がはっきりしたわけではなく、ワクチン製造と世界中への配布のメドも立っていない。そういう状況において五輪のような世界各地からアスリートが結集することは不可能である。

つまり来年七月を見据えても、コロナ対策と五輪開催は両立しないのだ。であれば一刻も早く中止決定を行うべきだろう。中止決定によって支出しなければならない違約金などもあるだろうが、今後予定されている数千億円の支出の多くをできるだけ早くコロナ対策に回すべきだろう。そういう意味でも「中止一択」なのだ。

しかし、私たちはコロナ状況のみを中止の根拠としているわけではない。コロナ状況によってよってオリンピックの問題点がこれまで以上に顕在化してきたと思う。

アスリートファーストが至上命題であれば、延期先の日程が今年と一日しか違わないという設定はあり得ないだろう。酷暑でマラソンと競歩を札幌開

催に変更したにもかかわらず、この日程設定という結論はアメリカNBCなどの莫大な放映料や他の世界的競技日程などとの関係で下されたものであり、アスリートのことなんて一顧だにされていないことの証左ではないのか。

▼なぜいま「中止」を決定できないのか

コロナ状況の悪化を隠蔽してまで延期決定を引き延ばし、さらにいま来年開催の中止決定を引き延ばしている最大の原因は「カネ」にある。一九八四年のロス五輪以降のオリンピックはまさに「金＝カネ＝メダル」至上主義が加速する歴史だった。東京五輪は当初七〇〇〇億円というコンパクトな費用で開催可能であることを売りにしていたはずが、今では三兆円を超える経費がかかり、延期すればさらに数千億円の追加費用が発生するという。しかも追加費用の負担についてはIOCは否定的であり、ほとんどが日本側の負担となりそうな雲行きである。それでは追加費用負担を回避するために中止すればよいではないかという選択もそう単純に決められない。

というのも当初見込まれていたスポンサー料やチケット代などが収入としてカウントできなくなり、その他の経済効果を鑑みるとマイナス効果は絶大だという。関西大学の宮本勝浩は経済的損失が延期の場合だと六四〇八億円、中止だと四兆五一五一億円に及ぶと試算した。

こうした試算はどこまで現実味を帯びているのか怪しい部分もあるが、本来オリンピック開催によって多大な利益を得るはずだった一部の企業や大会関係者が「梯子を外される」事態に水面下で「徹底抗戦」しているというのが現実の姿なのではないだろうか。

オリンピック関連予算というのは、わざと分かりにくくしているとでも言わんばかりに市民に対して「別世界」として存在している。通常予算とは収入・支出が当初から同額で決定しており、収入に見合った支出しか執行できない。ところが五輪予算は「青天井」の構造となっていて、新たな支出に対して新たな収入を打ち出の小槌のごとく加算して、枠組みそのものを勝手に塗り替えてしまうのである。組織委員会すでにV4（第四次）予算を二〇一九年末に発表している。東京都にも過去にオリンピック関連予算について質問したことがあるが、関連予算は各局にまたがっていて、全体額を算出することは容易でないと説明された。

反オリンピック運動も後半戦はこうした「カネ」の流れを研究してそのおかしさを追及していくことが問われていると私は思う。

▼私たちはこれまで何を目指し、いま何を目指しているのか

オリンピック災害おことわり連絡会（通称：おことわりンク）は二〇一七年一月に結成されてから三年半を経過した。一年間はオリンピック・パラリンピックにまつわる様々な問題を講座で検討してきた。その記録は「で、オリンピックやめませんか」（亜紀書房）にまとまっている。

次に昨年一年前企画を海外ゲストを交えて行った。これまで反五輪の会が培ってきた国際連帯の絆をもとに、平昌、LA、パリや他の多様な国の仲間たちが一週間にわたる私たちの企画に参加してくれた。さらに近代五輪を「祝賀資本主義」という独自の視点から切開するジュールズ・ボイコフのシンポを早稲田大で行い、その記録集を最近発行した。オリンピックに反対する人のつながりは確実に広がりつつあった。しかし、まだそれは圧倒的少数の域を出なかった。

しかし今年は予期せぬコロナ状況下で、「中止一択！東京五輪」と題して集会・デモを行い、「オリンピックやっている場合じゃない」という中止派への多くの賛同を実感した。私たちはまず「即時中止」を求めて宣伝活動を行っていきたいが、先述のようにコロナ状況によって顕在化したオリンピック・パラリンピックの問題点をさらに多くの人たちと共有していくことが必要だ。「いっそのこと二〇二四年まで東京開催を延期してパリ開催を潰したい」という声がパリの反オリンピックの運動の中から少なからず聞こえてくるという。気持ちはわからなくもない。しかし、私たちはNo Olympics Anywhere in the World! という原点を放棄するわけにはいかない。

東京五輪中止は現時点においてかなり可能性の高い選択となってきた。だからこそ東京五輪だけを終わらせるのではなく、その後のあらゆるオリンピック・パラリンピックを廃止に追い込む運動が必要だ。

いま、コロナ状況によって、オリンピックの醜悪さが私たちの目に際立ってきている。この好機を逃すことなく、世界の反オリンピック市民運動と連帯してのみ廃止を展望することが可能となる。七月二三日の集会に寄せられた世界各地からのビデオメッセージは私たちにそうした気持ちを共有させてくれる素晴らしいものだった。闘いはこれからだ！

書評

私が知らない「べ平連」運動

――平井一臣著「べ平連とその時代　身ぶりとしての政治」を読んで

有馬保彦（市民の意見30の会・東京）

一九六九年六月一五日、東京日比谷野外公会堂は満員で、日比谷公園内には数知れない市民グループや学生グループ、労働者グループがあふれ、あちこちでミニ集会をしていた。私たち高校生数名は、初めての集会デモ、あちこちウロウロ、ギターと歌で集会をしていた学生らを見ていると、一〇〇円で歌集を買わされ、「君たち、入る隊列がないなら、一緒に行こう」と日比谷公園を出発した。一橋大学べ平連だった。すでに東京・新宿駅西口地下広場ではフォークゲリラの集まりが行われており、担任教師からは、土曜の午後の新宿駅に行っているのかと詰問されたことがある。ギターに歌と、筆者が言う通り、若者文化としてフォークソングが政治の表現としてあった（グループサウンズにあこがれ、エレキギターに夢中の者は、校内で演奏すること自体が、高校規則・生活指導との闘いでもあったのだが）。

党派や全共闘系の学生らの当時の「べ平連」のイメージは、「軟弱で頼りにならない」、「プチブル平和主義者」と、揶揄され続けたように思う。私たちの高校でも党派からは、そうだった。「軟弱でなんで悪いんだ」。

吉川勇一氏が編纂した「資料　べ平連『運動』」という書名、そのとって付けたような「運動」とは何か。

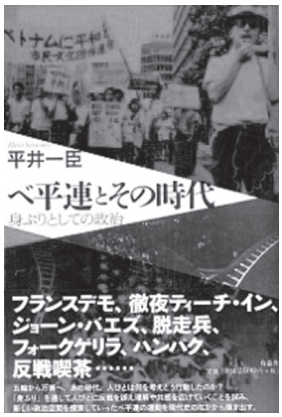
「べ平連」研究を先行した小熊英二、道場親信らの書物は、小田実や鶴見俊輔、吉川勇一らの書物や言説、聞き取りをまとめ、それで「べ平連」について判った、それで良しとした感がある。本書は、小さな「べ平連」にこだわり、そこに参加した個々の人物、個々の運動の刊行物、メモ資料などを丁寧に使い、先行の書より数段優れている。なにより、福岡べ平連、反戦喫茶「アウル」（八戸）、「ほびっと」（岩国）などの各地域のグループの活動が紹介されている。「神楽坂べ平連」の事務所に出入りし、小西反軍裁判の支援に重点を置いていた私は、本書を通じて知った事実やいきさつが多くあり、自分の運動の「根」を見つめ直す契機になったし、「言い出しっぺの論理」を語ることで「べ平連」を語るものが多いが、それを語らない本書は、運動の姿に少し近づいているとも思う。

疑問を少し。

筆者は「べ平連」が運動の後半、三菱一株株主運動を重点的に進めた「べ平連」は、「べ平連」という旗を揚げなくてもできる運動ではないかと指摘する。「べ平連」は、六〇年代後半から、ベトナム戦争に反対する過程で、反戦のためには日米安保体制の解体を意識し、そのために個々具体的な運動課題を必然的に闘った。反自衛隊運動もその一つ。「小西裁判」（筆者の記述、支援者は「小西反軍裁判」と「反軍」を強調する）もその過程で、私たちの前に現役の反戦自衛官が立ち現れた、それを支援することも日米安保体制解体への重要な「べ平連」の運動なのだ。こうした個々の運動を総称して吉川勇一さんは「べ平連『運動』」と表したのだろうか。

六八年「反戦と変革のための国際会議」での議論と対立の評価について、筆者は、〝「現代的不幸」にいる若者たちの反乱（小熊英二）〟を使い、世代間対立の構図で評価する。しかし、この会議での対立は、運動の、組織の在り方での根本的対立であって、世代間対立ではない、世代の異なる松田道雄さん（京都べ平連）も吉岡忍さん（神楽坂べ平連）も、この会議の議論では同じ立場であった（松田道雄「革命と市民的自由」、吉岡忍「べ平連ニュース」一九六八年九月一日）。二人の立場は、筆者が評価する「平場の議論を重視する市民運動」を守ろうとする、「べ平連」の組織原理そのものの擁護だった。

筆者、地域べ平連研究会の皆さんがさらに多くの、個別の「べ平連」を研究されることを大いに切望する。



『べ平連とその時代
身ぶりとしての政治』
平井一臣著、有志舎発行、
2,800＋税

太田昌国の夢は夜ひらく 123

みたび

「八月のジャーナリズム」から遠く離れて

「広島・長崎の悲劇」と「対米戦争の終わり」という観点を基調とする「八月のジャーナリズム」の日々が終わる。「八月のジャーナリズム」とは、在日朝鮮人の友が、苦い思いを込めて一〇年ほど前に私に語った言葉だ。これが嫌いだ、と。日本国の戦争はアジア侵略に始まったという事実を忘れ果て、アジア各地の民衆の抵抗闘争を前に敗北したことからも目を背けてきたのが、戦後日本社会の在り方だ。これに対する徹底不信の声だ、これは。

そんな日々に「この世の果て、数多の終焉」という映画を観た（ギョーム・ニクルー監督、フランス／仏語・ベトナム語、二〇一八年）。舞台はベトナム。描かれている時期は、一九四五年三月から一二月まで。物語の発端では、同年三月九日に日本軍がハノイ、サイゴンなどの主要都市で行なった仏軍を武装解除し仏統治を終わらせた明号作戦が出てくる。惨たらしい死体の中から這いずり出る一フランス兵（彼がその後の物語の主人公となる）の姿をカメラが執拗に捉えるのが冒頭シーンだから、具体的には、ベトナム北部で対中国国境に近いランソンで捕虜にしたフランス軍兵三百人以上を日本軍が殺害した事件を暗示していよう。日本は、一九四〇年六月ナチス・ドイツがフランスを敗北に追い込み、これを容認するヴィシー政権が成立したとき、これと協議して、フランス領インドシナに軍隊を駐留させた。北部では、抗日戦争中の中国へ米仏からの支援物資の流れを断ち切ること、南部では、来るべき英蘭との戦争に備えて港湾・飛行場を確保すること――いわゆるＡＢＣＤ包囲陣に対する対抗戦略の一環であり、ヴィシー政権側にも、日独同盟を結ぶ日本に利用価値を見出したのだろう。

四四年八月、ノルマンディ上陸作戦後にパリはナチスから解放され、ドゴール政権が成立した。フランスはもはや「わが味方にあらず」と日本側は考えたのだろう。それが四五年三月に対仏軍奇襲作戦となったのである。だが、この映画の日本への関心はここで終わる。映画はもっぱらフランス兵の動向と、それに取り入ってか、または植民地からの解放闘争のために敢えて「敵」側に潜入するスパイとしてか、あるいはまったくの市井のひととしてか、それらの違いを持ちつつフランス兵およびフランス民間人の間に介在するベトナム人の在り方を描く。ベトナムの若い女性が待ち受ける「買春窟」を背後にもつ酒場で、酔ったフランス兵たちが「ラ・マルセイエーズ」を大声で歌うシーンに、フランス人である監督は、両者の本質的な関係性を、自己批評的に、刻みつけたようだ。

この時代インドシナ半島で日本が何をなしたかを知るためには、この映画を離れて、別な方法が必要だ。ホー・チ・ミンによる一九四五年九月二日のベトナム独立宣言には、四四年一〇月から四五年五月にかけて、フランス・インドシナ植民地政府および日本軍による食糧徴発に見られるような「フランス人と日本人の二重の支配」のもとで「我々の同胞のうちの二〇〇万人が餓死した」との記述があることは有名な話だ。だが、日本でこの事実を知る者は極端に少ない。ベトナム人の目から見れば、四〇年九月から四五年八月までの五年間は「フランスと日本の二重支配」の下にあったという歴史的事実を忘れないようにすることが、「八月のジャーナリズム」を相対化する一方法なのだ。

香港についても同じだ。北京政府の強権的な対香港政策に対する批判は当然だ。同時に、イギリスが清国にアヘン戦争を仕掛けて、不当にも植民地化した香港を日本が占領した一九四一年一二月から四五年八月までの三年八ヵ月の日々の歴史も記憶に刻み込まなければならない。日本軍は真珠湾攻撃と同時に英軍支配下の香港に攻め入った。三週間足らずで英軍を降伏させて以降、日本軍が行なった略奪・性的暴行・強制移住などに関する証言は数多ある。だから、こんな時代に、松浦寿輝が「香港陥落」という作品を書いたことの意味は小さくない（『群像』二〇二〇年九月号）。

「八月のジャーナリズム」に浸っていると、アジアは遠ざかるばかりだ。表層を流れてゆく政治的な話題に足を掬われることなく、映画、文学、音楽、美術、演劇……さまざまなジャンルを交錯させながら、遠のくアジアの中にわが身を置きたい。

（8月29日記）

マスコミじゃけの天皇制 50

〈祭祀大権〉と「戦没者追悼式典」

――〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その15

天野恵一

コロナ対策の失敗（後手後手でトンチンカンな対策）。自分も主役のいくつもの権力犯罪の公然化などに追いつめられ、国会での論議を閉ざし続け野党四党ら憲法五三条（「いづれかの議員の総議員の四分の一以上の要求があれば、内閣は、その召集を決定しなければならない」）に基づく国会招集要求にも、まともに対応せず逃げ続けていた安倍晋三首相はついに、一三年前と同様、また政権を投げ出した。八月二八日夕方、「持病再発」を理由とする「辞任表明」。この戦後最長政権への、病気への同情をテコにした、本人の自画自賛辞任演説をなぞるような、ウンザリするマスコミ報道の洪水の中で、この原稿を書き出している。

前回同様、「潰瘍性大腸炎」であること自体は、めずらしく嘘ではないようではある。実は、八月一五日の「全国戦没者追悼式」への参加も危ぶまれていた、らしい。病をおして出席した安倍は、そこで「歴史と向き合う」という内容の言葉を初めて削り、「アジア諸国への加害責任や反省」についても、今年もまったくふれなかった。そして、自身が進めてきた攻撃的軍事拡大政策を正当化するベールとでもいうべきグロテスクな「積極的平和主義」というアベ言葉をプラスした。八月三〇日の『朝日新聞』には広島県原爆被害者団体協議会の佐久間邦彦理事長の以下のような言葉が紹介されている。

「被爆地の思いは、安倍首相には全く通じていない」。

これは、広島地裁「黒い雨」を浴びた人々八四人（原告）を被爆者と認定した当然の判決について、八月六日式典に来た首相に控訴断念を求めたが、聞く耳は持たず、国は県や市をひきつれて、平然と提訴に踏み切った（八月一二日）事実を踏まえての言葉である。

「被爆地の思い」だけでなく侵略戦争の戦場で殺し殺されていった人々の「思い」など、この首相には、まったく「通じていない」のだ。使い回し原稿朗読（コピペ）の常習犯のこの首相、そもそも、この人の演説全体に「心」などないのだ。そこに示されているのは情緒操作への政治意思だけではないのか。

さて、新型コロナウイルス感染拡大中のこの儀式、二〇府県の遺族が欠席、開始以来最少の式典。外への動きがなくなっていた天皇夫妻は出席した。

「私たちは今、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、新たな苦難に直面していますが、私たち皆が手を共に携えて、この困難な状況を乗り越え、今後とも、人々の幸せと平和を帰厩し続けていくことを心から願います」。

今年でなければない、こんな言葉が挿入された。もう一点マスコミがクローズアップしているのは、首相の方にはない、昨年同様おりこまれた「深い反省」という言葉の存在である。

天皇の言葉の方が歴史的反省に立った「心」がこもっている、などと考えてはいけない。

この天皇のコピペ言葉（官僚の作文がベースである。憲法上認められている「国事行為」ですらない、本当は憲法上の根拠なき、この天皇儀礼が「内閣の助言と承認」というチェックが、さすがにはずされているわけではあるまい）。

誰が、何を、どのように歴史的に「深く反省」しているのか。天皇の「言葉」からは全く理解できない。そこには「反省」のムードがあるだけだ。あの侵略戦争を作り出してしまった事実への具体的な反省なら、その歴史的責任を深く問い直す作業こそが不可欠であろうに。まず天皇制国家の責任が、「戦死者を祀る」行為、死者を英雄視する追悼儀礼（靖国神社中心）を通して、人々を戦争に動員していった天皇（国家）の歴史が批判的に問われなくてはなるまい。

この天皇を中心に置いた戦没者追悼儀式は、実は戦後消滅したはずの天皇の「祭祀大権」の行使であり続けているのだ。この大権は大日本帝国憲法上に根拠が示されていないが、超憲法的「大権」として、公然と認められていたものである。

今年のデモ出発前にドイツのジャーナリストにこう質問された。「どうしてドイツでいえばネオナチグループに支持されている首相の政権などが、日本では長く続いているのだ？」

〈ヒットラーは自殺に追い込まれたが、ヒロヒト天皇は戦後も最高の国家的権威としてあり続けたような、不思議な国だからね〉こう答えた。〈祭祀大権〉もまだ三代目象徴天皇制下で生きているのだ。

野次馬日誌

8月3日～8月28日

【8月3日】

海づくり大会◆「第40回全国豊かな海づくり大会」が、2021年秋に宮城県で開かれる見通し。

朝鮮人追悼式◆東京都が関東大震災の朝鮮人犠牲者追悼式を主催する団体に対し、例年通り許可を出す方向で調整。

ヘイトスピーチ◆東京都が、保守系団体の前年の行事での発言について条例に基づき審査し「犯人は不逞朝鮮人だったのです」などの言動をヘイトと認定、公表。

【8月4日】

徳仁、雅子◆赤坂御所で、気象庁の関田康雄長官と内閣府の青柳一郎・政策統括官から、熊本県などを襲った7月の豪雨について、被害状況などの「進講」を受ける。「進講」に先立ち、大きな被害を受けた福岡、熊本、大分の3県に、宮内庁を通じて見舞金を贈る。

「秋の園遊会」◆新型コロナウイルスの感染拡大のため、徳仁、雅子が「主催」する秋の園遊会の開催を見送る。

全国植樹祭◆島根県が、新型コロナウイルスの感染拡大で延期された同県大田市での第71回全国植樹祭の開催日が、翌年5月30日に決まったと発表。

核軍縮◆菅義偉・官房長官が記者会見で、核軍縮を巡る現状について、核兵器保有国と非保有国との対立にとどまらず複雑化していると主張。

【8月5日】

韓国人原爆犠牲者◆強制連行などで日本に渡り、広島で被爆して死亡した韓国人を追悼する慰霊祭が営まれる。

【8月6日】

徳仁、雅子、愛子◆被爆75年となった広島原爆の日に合わせ、赤坂御所で黙とう。

明仁、美智子◆宮内庁によると、広島原爆の日に合わせ、仙洞仮御所で黙とう。

秋篠宮、紀子、悠仁◆赤坂御用地の宮邸で、高知市で開催された「第44回全国高校総合文化祭」の総合開会式をオンラインで視聴。

靖国神社◆南京事件への抗議活動のため靖国神社の敷地に入ったとして、建造物侵入の罪に問われた被告2人の控訴審判決で、東京高裁が、一審東京地裁判決を支持し、被告側の控訴を棄却。

韓国人被爆者◆「韓国のヒロシマ」と呼ばれる韓国南東部・陜川で原爆犠牲者の慰霊式が開かれる。

広島「原爆の日」◆広島市中区の平和記念公園で「原爆死没者慰霊式・平和祈念式」が営まれる。

「震災追悼の日」◆福島県議会が東日本大震災が発生した3月11日を、追悼する県の日として制定する方向で調整。

【8月7日】

徳仁、雅子◆赤坂御所で蒲島郁夫・熊本県知事と面会し、7月の豪雨による同県の被災状況について説明を受ける。

朝鮮人犠牲者追悼式◆東京都の小池百合子知事が定例記者会見で、9月1日の関東大震災の朝鮮人犠牲者追悼式について、追悼文を送らない意向を示す。

アイヌ遺骨◆東京大の解剖学者らが北海道浦幌町のアイヌ民族の墓地から研究目的で持ち去った6体の遺骨を巡り、地元のアイヌ民族団体が返還を求めた訴訟について、釧路地裁で和解が成立。

【8月9日】

徳仁、雅子、愛子◆長崎原爆の日に合わせ、赤坂御所で黙とう。

明仁、美智子◆仙洞仮御所で黙とう。

長崎「原爆の日」◆松山町の平和公園で「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が営まれる。

李登輝◆森喜朗・元首相が、李登輝・元総統の追悼場が設置された「台北賓館」を訪れ、李元総統の遺影に弔意を表明。

【8月11日】

徳仁、雅子◆広島と長崎で開かれた平和式典に出席した国連軍縮担当上級代表の中満泉・事務次長と面会し、世界の核軍縮を巡る状況などについて話を聞く。

福島原発事故◆福島第1原発事故で福島県から宮城県などへの避難を強いられた住民ら83人が国と東電に損害賠償を求めた訴訟の判決で、仙台地裁が、東電に対し、原告77人に計約1億4458万円を支払うよう命じる。国の責任は認めず。

【8月12日

「黒い雨」◆広島市への原爆投下直後に降った放射性物質を含んだ「黒い雨」を巡り、国の援護対象区域外にいた原告84人全員（死亡者含む）を被爆者と認めた広島地裁判決について、被告の広島県、広島市、訴訟に参加する厚生労働省が控訴。

【8月13日】

靖国参拝◆安倍晋三首相の実弟の岸信夫・自民党衆院議員が、靖国神社を参拝。共同通信の取材に対し、玉串料を「私費」で納め「衆院議員岸信夫」と記帳した。

【8月14日】

正親町天皇◆NHKが、大河ドラマ「麒麟がくる」の新たな出演者を発表。第106代天皇・正親町天皇を、坂東玉三郎が演じる。

【8月15日】

徳仁、雅子◆日本武道館で行われた政府主催の全国戦没者追悼式に出席。徳仁が、新型コロナウイルス感染症の困難な状況を乗り越え、平和を希求することを願うとする「お言葉」を読み上げる。

明仁、美智子◆仙洞仮御所で、全国戦没者追悼式に合わせて黙とう。

愛子◆赤坂御所で黙とう。

戦没者追悼式◆「政府主催の全国戦没者追悼式が日本武道館で行われる。新型コロナウイルス感染症の影響で、20府県の遺族が欠席。徳仁が前年に続き、「お言葉」に「深い反省」との文言を盛り込んだ。

千鳥ケ淵戦没者墓苑◆安倍晋三首相が、千鳥ケ淵戦没者墓苑を訪れ、献花。

靖国問題◆小泉進次郎・環境相、高市早苗・総務相ら4閣僚が、東京・九段北の靖国神社を個別に参拝。参拝したのは2人の

ほか、萩生田光一・文部科学相と衛藤晟一・沖縄北方担当相。安倍晋三首相が参拝を見送り、自民党総裁として玉串料を「私費」で奉納。自民党の高鳥修一・総裁特別補佐が神社を訪れ、代わりに納める。「みんなで靖国神社に参拝する国会議員の会」が、会長の尾辻秀久・元参院副議長と、事務局長で日本遺族会会長の水落敏栄・参院議員が参拝。高鳥特別補佐ら自民党グループ「保守団結の会」、同党の稲田朋美幹事長代行が率いる「伝統と創造の会」がそれぞれ参拝。自民党四役の下村博文・選対委員長らが個別に参拝。

【8月18日】

天皇、皇族◆新型コロナウイルスの感染拡大を受け、当年は那須御用邸などでの天皇一家の夏の静養を見送る。明仁、美智子の静養も、同様に見送り。

徳仁、雅子◆徳仁が赤坂御所で、「水問題」の指南役である政策研究大学院大教授、広木謙三と面会。徳仁は「新型コロナウイルス感染症大流行下の水防災に関する国際オンライン会議」を20日に聴講予定で、美智子と一緒に、広木から事前の説明を受ける。

靖国参拝◆西村康稔・経済再生担当相が記者会見で、靖国神社を16日に参拝し、「私費」で玉串料を奉納した。

東京裁判◆西村康稔・経済再生担当相が記者会見で、極東国際軍事裁判に関して「さまざまな議論があると承知している。ただ日本はサンフランシスコ講和条約を受け入れているので何か議論するつもりはない」。

【8月19日】

タイ◆首都バンコクで、中学・高校生ら500人以上が教育省前に集まり、プラユット首相の辞任や憲法「改正」を要求。あからさまな王室改革の訴えは出なかった。

【8月20日】

徳仁、雅子◆赤坂御所で、新型コロナウイルス禍における水関連の災害対処方法などを議論する国際オンライン会議を聴講。「水問題」の指南役である政策研究大学院大教授、広木謙三が同席。

【8月21日】

秋篠宮、紀子◆宮内庁が、秋篠宮、紀子が、インターネット上で開催中の第44回全国高校総合文化祭「2020こうち総文」に参加した高知県の高校生と、オンラインで懇談した。宮内庁によると、懇談は19日午後に実施され、2人は音楽や美術など各部門の参加者や、大会運営側の高校生ら約20人と約1時間半、画面越しに交流した。

大嘗祭◆前年11月に行われた「大嘗祭」の中心儀式「大嘗宮の儀」などに、京都府の西脇隆俊知事らが公務として参列したのは憲法の政教分離の原則に違反するとして、府民12人が、府が支払った公費約46万円の返還など支出の是正に必要な措置を講じるよう知事に勧告することを求め、府監査委員に住民監査請求。

【8月22日】

「対馬丸」◆「対馬丸」が鹿児島県沖で米潜水艦に撃沈され、子どもら1500人近くが犠牲になった事件から76年で、那覇市と広島市で慰霊祭が営まれる。

【8月23日】

皇位継承◆河野太郎・防衛相が、動画投稿サイト「ユーチューブ」などに番組を配信し、安定的な皇位継承を巡り女系天皇を柔軟に検討すべきであるとの認識を示す。

【8月24日】

皇位継承◆自民党の岸田文雄・政調会長が記者会見で、安定的な皇位継承の在り方を問われ、母方が天皇の血筋を引く女系天皇を認める是非に言及せず。

【8月25日】

皇位継承◆菅義偉・官房長官が記者会見で「男系継承が例外なく維持されている重みなどを踏まえながら、慎重かつ丁寧に検討を行っていく必要がある」と述べた。／世耕弘成・参院幹事長が記者会見で安倍晋三首相が主張してきた男系継承を支持。

愛知知事リコール◆愛知県の大村秀章知事の解職請求（リコール）を目指す「高須クリニック」の院長が、リコールに向けた署名集めを開始。

【8月27日】

大嘗宮◆前年11月に行なわれた「大嘗祭」の舞台「大嘗宮」の設営や撤去などにかかった総額が、約12億5500万円。約14億3千万円だった前回を下回った。

【8月28日】

安倍退陣表明◆安倍晋三首相が官邸で記者会見し、辞任する意向を表明。

集会の「眞相」

国家による「慰霊・追悼」を許すな　8・15前段集会とデモ

今年の8・15は、「国家による『慰霊・追悼』を許すな！8・15反『靖国』行動」という名称で取り組まれた。

八月一日に「コロナ危機と天皇制」と題する集会、八月一五日には例年通りの反「靖国」デモを行うとともに、今年は、「国家による慰霊はなぜ問題か」と題するA4判三つ折りのリーフレットも作成し、国家による慰霊・追悼の問題を広く訴える試みにも取り組んだ。

八月一日の集会では、北村小夜さんからお話しをうかがった。小夜さんには、戦中の体験を世代を超えて伝えることの難しさについて、藤田嗣治の戦争画を例にして、わかりやすくお話ししていただいた。

藤田の戦争画は、戦争のリアルな様相を描いていることによって、戦争の残酷さを描写していてそこに反戦の意をくみ取ろうという見方が現代では散見されるが、例えば、著名な作品「アッツ島玉砕」は、陸軍の依頼によって、陸軍の意図に添った構図で描かれたもので、それは、国威発揚の目的で宣

伝・展覧会公開された。展覧会に集まった人のなかには、その画に賽銭を投げる人もいた。実際に観に行った北村さんはこの絵を見て、米軍に対する復讐心を掻き立てられたという。その時代にあっては、まさしく戦争遂行に国民を動員するための戦争画にほかならなかったのだと。

集会は、続いて医療労働研究会の片岡真理子さんから、現在進行中の「新型コロナ感染対策」から現代医療現場をどう見るかという報告を受けた。「日本政府は極端に検査を抑制し、医療も『今あるもの』で間に合わせようとしてきた」とし、その理由を「戦前からの人民管理のための行政機関である厚生省・保健所あるいは予防研究所などを駆使して、社会防衛のために感染者を『ウィルスの塊』とみなして人格を否定し、人権と治療を無視して隔離する差別対策をとり続けたからである」と指摘した。集会はコロナ禍での人数制限もあって七五名の参加。

一五日は、韓国ＹＭＣＡに集合し、日韓民衆連帯全国ネットワーク、アクティブ・ミュージアム（ｗａｍ）、即位大嘗祭違憲訴訟、オリンピック災害おことわり連絡会、大軍拡と基地強化にＮＯ！アクション２０２０の各団体からの連帯アピールを受けて、靖国神社に向けてのデモに出発した。デモは一五〇名の参加を得た。（梶野）

靖国に抗議した香港人弾圧事件 東京高裁が控訴を棄却

八月六日、東京高裁第五刑事部（裁判長・藤井敏明）は、二〇一八年一二月一二日、靖国神社の外苑で「南京大虐殺」に抗議した香港人の郭紹傑（グオ・シウギ）さんと、その行動をビデオで記録していた嚴敏華（イン・マンワ）さんに対する不当弾圧事件に対して、「本件各控訴を棄却する」との不当判決を言い渡した。

昨年一〇月一〇日に言い渡された二人に対する一審判決は、郭さんを懲役八か月に、嚴さんを懲役六か月に処する（未決勾留数中各一五〇日）という不当判決であった。判決後、二人は香港に強制送還されたが、無罪を訴える二人は即日控訴した。

その控訴審第一回は六月二四日に開かれた（本紙七月号参照）。しかしながら、弁護側で準備した書証・人証は全て不採用となり一発結審、そして八月の判決言い渡しに至ったわけである。

この日、ただでさえ狭い警備法廷は、いわゆる「物理的距離」を取るためとして傍聴者は一一人しか入れず。そこで裁判所は控訴を棄却し「本件においては、本件抗議活動自体が罪に問われているのではなく、本件抗議活動を行うために本件外苑に立ち入った行為が問題とされている」のだ、という論理で、靖国神社に対する抗議という現実と記している。他の参加者の高評価はこの方法によっている。

では、評者の不満はどこにあるか。それは著者が天皇の戦争責任を追及していないからである。もちろん、著者も「問われざる問題群と責任者」という章を置いて、その筆頭に「昭和天皇」をあげている。だが、検察側が被告人たちの「共同謀議」を立証しようとしたことに対して「国務［最高補弼者――内閣総理大臣］と統帥［最高輔翼者――軍令部総長、参謀総長］の分立、そして陸海軍の対立抗争などがあり、「共同謀議」などやりたくてもやれなかった」（一一一ページ）などと記してしまっている。両者の上にいた天皇を被告人から除外しているのであるから当然である。あたかも天皇も首相も平和を望んだのに、軍部（陸軍）が勝手に戦争をしたという城山三郎『落日燃ゆ』史観のような地平に陥っている。被告人への絞首刑執行も一二月二三日とさらりと日付のみ記されている。

次回は、中里成章『パル判事』（岩波新書）を九月一五日に読む。（ぐずら）

【学習会報告】

宇田川幸大『考証東京裁判――戦争と戦後を読み解く』

（吉川弘文館・二〇一八年）

本書の評価は、評者と他の参加者で全く異なるものだった。他の参加者は、東京裁判の過程を丹念に追った興味深い著書であると評価、評者の評価は極端に言えば、事実経過をまとめたレポートだというものであった。

著者は「あとがき」で「戦争責任問題の追及は、単なる「犯人捜し」ではない（略）人間の心を、暗黙の裡に支配している差別意識や偏見など、暴力や抑圧を支えてしまう危険因子を、戦争犯罪や戦争裁判といった様々な事例から一つ一つ確認してゆく作業、そして、今を生きる私たちが、こうした危険因子をどこまで克服することができているのかを測定する作業。（略）これらが「戦争責任・戦後責任を考える」ということなのだと思う」

を外形的に無視しつつ、実際には靖国神社に対する抗議という現実を政治的に裁いたのである。最悪の判決と言わざるを得ない。

この不当判決を受け、二人は最高裁に上告手続きをとった。裁判はまだ終わっていない。引き続き注目を。

（北野誉）

2020ヤスクニキャンドル行動報告

第一五回目となる「2020平和の灯を！ヤスクニの闇へキャンドル行動」。コロナ禍の今年は、東京の韓国YMCA（国際ホール）をメイン会場としつつ、韓国・台湾とはZoomでつなぎオンラインで開催しました。

今年のテーマは、「コロナ、オリンピックとヤスクニ」。シンポジウムのパネリストは、高橋哲哉さん（東大教授）、米須清真さん（新しい提案実行委員会）、武藤類子さん（福島原発告訴団団長）、金東椿さん（韓国・聖公会大学教授）、呉栄元さん（台湾・労働党代表）の五名。「安倍政権のコロナ対応には〝一定の人々を死ぬに任せる〟政治が作動している」（高橋）、「沖縄への基地集中は差別、植民地主義」（米須）、「原子力緊急事態宣言下、福島はオリンピックどころじゃねぇ」（武藤）、「朝鮮戦争は内戦ではなく、植民地主義・帝国主義の延長線上にある」（金）、「五〇年代白色テロ犠牲者の大多数は、日帝植民地支配下で民族感情に目ざめた人々だった」（呉）――五名のパネリストは植民地主義の過去と現在を告発されました。

「遺族の訴え」では、韓国の李熙子さんと遺族は、「私たちの父の名前を外せ」と書かれたウチワをふり、「ノー！アベ」「ノー！ヤスクニ」と訴えました。台湾からは、故陳明忠さん追悼会で歌われた『青春戦闘曲』が流されました。

そして、コンサート。今年は李政美さん・竹下由美子さんが出演。李政美さんは「序詩」「奪われし野にも春は来るのか」等六曲を披露してくれました。今年はデモは中止、代わりに最後に「朝露」を日中韓三か国語で歌いながらキャンドルを揺らしました。

（ヤスクニキャンドル行動実行委員会事務局／矢野秀喜）

反天日誌

8月1日（土）●反「靖国」行動前段集会「コロナ危機と天皇制」（集会報告参照）

8月6日（木）●香港人靖国抗議見せしめ裁判控訴審判決（集会報告参照）

8月8日（土）●第15回キャンドル行動 平和の火を！ヤスクニの闇へ（集会報告参照）

8月15日（月）●国家による『慰霊・追悼』を許すな！ 8・15反「靖国」行動デモ（集会報告参照）

8月23日（日）●おことわリンクスタンディング

集会情報 INFORMATION

開催中●朝鮮人「慰安婦」の声をきく 13時～18時（月・火・休日休館）／WAM 女たちの戦争と平和資料館（地下鉄早稲田駅）／主催：同館

9月11日（金）●入管法改悪の問題点 18時～／ニュー新ホール（JRほか新橋駅／指宿昭一／主催：救援連絡センター（03-3591-1301）

9月12日（土）●全都反弾圧集会 13時～・15時デモ／千駄ヶ谷区民会館（JR原宿駅ほか）／主催：同実行委

9月17日（木）●朝鮮戦争の終結と日朝国交正常化の実現を 18時開場／文京区民センター3A（地下鉄春日駅ほか）／布施祐仁、朴金優綺ほか／主催：「朝鮮半島と日本に非核・平和の確立を」市民連帯行動（連絡先070-6997-2546ほか）

9月20日（日）●シビル市民講座「ベルリンの壁」崩壊後のドイツ・第一回 13時30分～／柴中会公会堂（JR立川駅南口ほか）／米沢薫／主催：シビル（042-524-9014）

9月23日（水）●おことわリンクスタンディング 18時～／新宿駅南口バスタ前

10月10日（土）●北村小夜さんと語ろう！ 増補版『戦争は教室から始まる』出版を記念して 12時30分開場／かながわ県民センター305号室（JR横浜駅西口ほか）／北村小夜／主催：「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会（090-3909-9657）

10月13日（火）●敵地攻撃力保有を許すな！ 防衛予算概算要求分析会 18時15分開場／文京シビックセンター4Fシルバーホール（地下鉄後楽園駅ほか）／杉原浩司、吉沢弘志、木元茂夫、大西一平、池田五律／主催：大軍拡と基地強化にNO！アクション2020

10月14日（水）●即位大嘗祭違憲訴訟（差し止め差し戻し審）第一回口頭弁論 13時15分～／東京地裁511号法廷（地下鉄霞ヶ関駅ほか）

10月18日（日）●シビル市民講座「ベルリンの壁」崩壊後のドイツ・第二回 13時30分～／柴中会公会堂（JR立川駅南口ほか）／米沢薫／主催：シビル

10月20日（火）●敵地攻撃力保有を許すな！ 防衛省申し入れ行動 18時30分集合／防衛省前（JR市ヶ谷駅ほか）／主催：大軍拡と基地強化にNO！アクション2020

＊会場等の理由により中止・延期の可能性あり。主催者へのご確認を。

……神田川

●このところ、よく作業に参加してる。もう少し頑張ります。（熊）

●私ももう少し頑張ります（木菟）

●あたしも頑張る。みんなも！（貂）

●頑張ってもあまり結果が出ない（蝙蝠）

●僕はあさってから頑張らなきゃ（貘）

●私は頑張れないかも（鰐）